

江藤淳論

菊田均

●
冬樹社

江藤淳論
菊田均

●冬樹仕

著者紹介 菊田 均（きくたひとし）

1948年2月，千葉県に生まれる。

1972年，法政大学文学部日本文学科卒業。

1976年，法政大学大学院人文科学研究科修士課程修了。

江藤淳論

1979年9月10日 初版第一刷発行

著 者 菊田 均

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町 3-27-6

電話 東京03(264)0346 (代)

定価 1300円

印刷・製本 凸版印刷株式会社

©Hitoshi Kikuta 1979 Printed in Japan

本書の内容の一部，あるいは全部を無断で複写機器等
いかなる方法によっても複写複製することは，法律で
認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の
侵害となりますので，予め小社の許諾を求めて下さい。
0095-10319-5190

目次

1	批評家の誕生	5
2	役割としての批評	25
3	批評家の「存在」	41
4	死と再生	61
5	「私はどこから来たか」	77
6	『成熟と喪失』	95
7	表現としての政治	115
8	批評の社会化	135
9	戦後論争	151
	あとがき	173
	江藤淳主要参考文献目録	177

装帧
安達史人

江藤淳論

1 批評家の誕生

江藤淳の批評を読んで感じるのは、この批評家の「生」の不思議なあり方である。それは固定した一つの状態であるよりも、「動き」といった方がふさわしい。不断に形成されながら、同時に崩壊しつつある感受性の場、といったおもむきがそこにはある。それは独特なものであって、世に少なくないこの批評家に対する誤解は、そうした彼の「生」の特質を見定めることができずにいるところに理由を持っているといつてよい。

江藤淳の「生」は、たとえば論理的整合性といったものから自由なところに形成される。その一つの例として、『作家は行動する』と『小林秀雄』の間の変容の問題をあげることができる。それは小林秀雄評価に関する正反対の態度であるから、事情を知らない人間がびっくりしたのも当然のことだった。しかも江藤淳は、その変容を「……私は小林秀雄氏に対して不公正な態度をとっているのではないかという疑いに、突然とりつかれた。」（『小林秀雄』「あとがき」）と説明しているだけである。

ごく普通に考えて、「突然」の変容という説明がほとんど何の説得力も持たないのは当然のことである。その結果、二つの小林秀雄観のズレを「転向」ということばで説明しようとする論まで出てくるほどだった。しかしまた、本人にいわせれば、それは「突然」としかいいようがなかったことも確かである。人間の考え方が「突然」変わるわけがないというのが常識であるが、そうした常識を超えたところで「生」の変容が起ってしまったのである。

この「突然」の変容を、「転向」というような合理的解釈で説明するか、あるいはそこにこの批評家の「生」にとつての固有の必然を見出すかが、江藤淳評価の最初の分岐点だと私は思う。これまでのところを見ると、江藤淳の「生」の動きはむしろ誤解され続けてきたといつてよい。「生」の特質は直視されぬままに、「転向」ということばの延長上にある合理的解釈によって事態は処理されてきたように見える。

もっとも江藤淳の側にも問題がなかったとはいえない。彼の「生」の形態が特異なものであり、他人にストレートに理解しやすいものではなかったにもかかわらず、他人に対してそれを十分に説明してきたとはいえないからだ。「突然の変容」を私は理解するが、その私にしても、その点についての江藤淳の弁明を聞きたいと思った瞬間があったことは否定できない。

批評家としての江藤淳を、以上のような観点だけで評価することはできない。一人の

批評家には様々な要素がつきまといっているはずだからだ。しかしまた、江藤淳に関して「生」の特異な動きという一点がもっとも基本的な要素であることは否定できない。そうした観点を含みながら、以下この魅力ある批評家の秘密を解明してみたい。

江藤淳が「三田文学」に「夏目漱石論（上・下）」を発表したのは、昭和三十年十一月・十二月のことである。当時彼は二十二歳、慶応大学の三年に在学中であった。

半年の期間を置いて、翌三十一年七月・八月には、「続・夏目漱石論（上・下）」が「三田文学」に発表された。「夏目漱石論」正・続を合わせて、作家論シリーズ・12『夏目漱石』として東京ライフ社から刊行されたのは、その年の十一月である。ここから、現在までほぼ四半世紀にわたる批評家江藤淳の歴史がはじまる。

「夏目漱石論」を引き出したのは、当時戦後第三次「三田文学」の編集長だった山川方夫である。山川が江頭淳夫という文学青年を知ったのは、「三田文学」編集部に寄贈されていた「PURETÉ」という同人誌によってであった。四号より「位置」と改題されることになるこの雑誌の創刊号（昭29・4）に江藤淳は「マンスフィールド覚書」という文章を、三号（昭29・12）には「マンスフィールド覚書補遺」という文章を発表していて、山川はこれらの作品を読んでいたのである。

『なつかしい本の話』によれば、江藤淳がキャサリン・マンスフィールドを知ったのは、昭和二十七年夏、在学中の日比谷高校の英語教師梶野^{とどろ}氏によってである。彼がマンスフィールドをどのように受けとめたかは、「マンスフィールド覚書」にもっともよく示されている。

マンスフィールドにとって、人生を稀薄なものにしたのは一つには病気だったが、一つには彼女がニュージーランド生れだという事実である。そして病気からは「死」のテーマが生れ、(略)ニュージーランドに生れ、少女時代に英本国にやって来て、そのまま、二度と故郷を見ることがなかったその経歴から「過ぎ去ったものへの狂おしい渴望」が生れた。

と江藤淳は書いているが、ここには「死」の主題と、「過ぎ去ったもの」への主題とが指摘されている。後者の主題が、日比谷高校在学中に発表された「サロイヤンとアメリカ文学」(昭28 星陵3号)の主題である「たえず故郷を恋いしたうもの」の直接的な発展であることは明らかだとしても、マンスフィールド論全体の基調が病氣——「死」の主題によって貫かれていることに変わりはない。同じ文章の中で江藤淳は、「彼女が生をともしていたのは、死者達とだったといっても、これは誇張にはなるまい」と書いているが、こ

うした「死」への親近は、堀辰雄への傾倒とともに、このころの彼の内面を形作っていたものである。「フロラ・フロラアヌと少年の物語」（昭27 星陵2号）が書かれたのは、堀辰雄——「死」の線上においてであった。

興味深いことは、続いて書かれた「マンスフィールド覚書補遺」が、同じ作家を同じ人間が批評したものととは考えられぬほどの変化を示している点である。最初のマンスフィールド論に比べて第二の論には、一種乾いた調子が認められる。「死」について熱っぽく語っていた江藤淳の面影はここにはなく、かわりに『夏目漱石』に見られるような、生活感にあふれたものを見てとることができる。第二の論の「あとがき」で江藤淳は、『覚書』とは逆の方向から、マンスフィールドの姿を描いて見たかった……と書いているが、このことは二つのマンスフィールド論の間の八カ月間に、精神上の急変があったことを示している。

そのうちに私にある転換がおこった。ひと言でいえば、私はある瞬間から死ぬことが汚いことだと突然感じるようになったのである。さりとて人生に意味があるとは依然として思えなかったので、私には逃げ場がなくなり、自分を一個の虚体と化すこと、つまり書くことよりほかなくなった。（『文学と私』昭41・11）

と江藤淳は書いている。「そのうちに」が何を指すのかこの文章だけではよくわからないが、「江藤淳自筆年譜」(昭和二十九年)にはその点について具体的な記述がある。

六月、ある朝咯血し、愕然とする。結核の再発なり。義母は依然として病床にありた
め、ふたたび家に二人の病人ある状態となり、暗澹たる心境となる。「文学的」なもの
への嫌悪生ずる。最も辛き夏を送る。

九月、父高熱を発し、病臥すること数旬、ついに家に三人の病人ある状態となる。ひそ
かに父亡き後のことを考える。

十一月、「PURETE」第三号に『マンスフィールド覚書補遺』を書く。この療養中に一
転機を得る。

「転機」と江藤淳は書いているが、「死」を汚ないと感じたことは、江藤淳の中に「死」
への親近とはちがった基軸が形成されつつあったことを示している。年譜の中の、「ひそ
かに父亡き後のことを考える」というくだりは、家族間の実際的な関係の中に置かれた
「死」、いわば死の社会的側面を象徴しているともいえる。この転機の中で江藤淳は、それ
まで親しんできた堀辰雄から立原道造を結ぶ線上にあるものを「文学的」だとして切り捨
てることになる。転機の後には書かれた第二のマンスフィールド論が、第一のそれとはおよ

そちがった相貌を持つことになったのは当然であった。二つのマンスフィールド論の間には、ほとんど堀辰雄と夏目漱石ほどのちがいが横たわっているのである。

山川方夫が江藤淳に原稿の提示を求めたのは、第二のマンスフィールド論が発表されてからほぼ半年後の、昭和三十年五月のことである。そのとき江藤淳は、はじめから漱石論を書くつもりでいたわけではなかった。のちに回想しているところでは、漱石論の他に小林秀雄論、堀辰雄論が考えられていたという。ただし堀辰雄論は、訣別の論として書かれる予定だったという。

小林秀雄論はのちの『小林秀雄』で実現されることになるが、堀辰雄論は今日に至るまで書かれていない。わずかに「戦後文学と芥川竜之介」(昭42・3)という文章の中に、芥川を論じながら堀辰雄にふれた部分があるだけである。訣別の論とはいえ、漱石や小林秀雄と同じ比重で堀辰雄論の構想があったことは、そのころの江藤淳にとって堀辰雄がなおどれだけの重みを持っていたかを示している。逆にいえば、堀辰雄は批評家として江藤淳が成長して行く過程で切り捨てられて行ったのである。

江藤淳がはじめて他人からの依頼で批評を書く対象に選んだのは漱石であった。昭和三十年の七月・八月、信濃追分の農家で漱石論は書かれた。この農家を紹介してくれたのは、江藤淳の日比谷高校時代の友人で、「PURETE」の編集者としてマンスフィールド論を書きくことをすすめた安藤元雄である。『星陵』と私(昭41)という文章の中で江藤淳が回

想しているように、安藤氏はそのころ「堀辰雄の熱心な崇拜者」であった。江藤淳の堀辰雄への関心は安藤氏を経由したものであるし、信濃追分という場所が堀辰雄にとって思い出深い場所であることは、堀辰雄の読者であった者ならだれでも知っている。堀辰雄的なものを否定するところに成立した『夏目漱石』は、堀辰雄ゆかりの土地で書かれたことになる。

今から考えると、批評家としての江藤淳の出発点が小林秀雄でも堀辰雄でもなく漱石だったことは、彼の資質にふさわしいものだったことがわかる。処女作には全てが含まれているとはしばしばいわれることだが、江藤淳の『夏目漱石』ほど截然たる処女作は稀である。その間の事情は、東京ライフ社版『夏目漱石』に付された「あとがき」によく示されている。

ぼくには、自分の眼に見える漱石の姿を、出来るだけ生々と描いてみたいという兇暴な衝動があった。そして、この漱石の姿ほど、世に行われているおびただしい評伝、研究書に描かれた「文豪」の影像と似ても似つかないものはなかった。そうである以上、ぼくにとっては漱石について何も語られていないのと同じことである。これが、ぼくに漱石論を書かせた唯一の、同時に最大の理由である。

この文章が明らかにしているのは、江藤淳という昭和生れの一青年が、夏目漱石という明治の一家を本気で必要としていたということである。その作家について書くことが、同時に自分の生の形式を明らかにして行き、明らかにされた生の形式が今度は作家の姿を写し出す動力となつて働くという、作家と批評家の緊迫した関係は、『夏目漱石』全体について指摘することができる。小林秀雄にとつてのドストエフスキー、中村光夫にとつての二葉亭四迷、平野謙にとつての島崎藤村などが示しているような、あらゆる批評文学の傑作が書かれるための条件が、若い江藤淳のうちに早くも出そろっているのである。

だとすれば、江藤淳の『夏目漱石』が持つ「新しさ」は、漱石研究の文脈におけるそれだけでなく、戦後批評史の上での新しさだということになる。文学上のあらゆる本物の新しさが、人間の新しさそのものに根拠を持つように、『夏目漱石』が示しているのは江藤淳という人間の新しさである。「あとがき」にいう「兇暴な衝動」が、江藤淳の新しさと漱石についての俗説（伝説）とが激しく衝突した結果生じた衝激を意味していたのはいうまでもない。

江藤淳以前の漱石についての俗説のもっとも代表的なものは、小宮豊隆の『夏目漱石』に代表されるような、「則天去私」と結びついた「偉大なる漱石」という神話である。それに対して江藤淳が『夏目漱石』の中でくり返しているのは、「平凡な生活人であった漱石」（「あとがき」）であり、そうした「漱石の生ま生ましい姿」（同前）である。だが彼は、「偉

大なる漱石」に対して、芥川竜之介が「將軍」の中で乃木大将を批判したように、「卑小なる漱石」を対置したのではない。「平凡な生活人」は、「卑小な生活人」とは異なっている。それは偉大でもあれば卑小でもある生活人のことであって、それを単に卑小の側面からだけ見ようとしたのでは、平凡ということばに含まれているものの深さを見落すことになる。明敏なはずの芥川はそのことがわかっていなかったが、二十二歳の学生であった江藤淳は、「平凡な生活人」であった漱石の非凡さをよくうかがうことができた。『夏目漱石』は、そうした漱石の深さと恐ろしさを描き切った著作だということができる。

江藤淳の新しさは、小宮豊隆をはじめとする漱石研究家達に対してだけ意味を持っているのではない。『夏目漱石』の冒頭部が示しているのは、近代日本文学全体に対する異和感である。

日本の作家について論じようとする時、ぼくらはある種の特別な困難を感じないわけには行かない。西欧の作家達は堅固な土台を持っている。ぼくらはその上に建っている建物のみを、あるいはその建物の陰にいる大工のみを論ずればよい。(略)文学を学ぼうとする向きは、欧米の文学を学ばいので、日本の作家を相手にしている時には事情はそれほど簡単ではない。彼らを問題にしようとするれば、先ず、彼らの作品の成立っている土台から問題にしてかからねばならない……(略)。したがって、日本の作家に關す